

## 若手の会シンポジウム報告

テーマ：「家政学を活かす」 専門領域を超えた研究ネットワークの構築を考える

日時：2008年6月1日(日) 12:00~13:00

場所：日本女子大学百年館百301教室

パネリスト：

- ・ Emma Collins 先生 (Freelance Home Economist)
- ・ 山口厚子先生 (名古屋女子大学)
- ・ 大澤香奈子先生 (平安女学院大学)



大澤香奈子先生：

私からは、事例の発表をさせていただきます。この「蚕の総合的利用法の開発プロジェクト」は、今、実際に取り組んでいるものです。このプロジェクト全体の背景には、日本の蚕糸業が現在危機的状況の中、世界に誇るレベルであった日本の絹糸をなんとか残していこう、日本の伝統文化の保存や継承を進めていこう、その中で科学技術との融合もはかっているということがあります。そういう中で、KCCW(京都繭文化研究会)が発足し、これと大学とが連携する形でこのプロジェクトはすすめられています。大学内での連携チームと企業間の連携チームとの間で物的交流や人的交流をしています。大学の中だけを見ても繊維工学、染色学、食品工学、服飾造形の4つの領域が連携しています。大学内での連携の背景としては、学内で以前からすすめていた「もったいない運動」推進の中である程度その基盤ができていました。今回のプロジェクトにあたり、食品工学がそこに加わり連携の輪が広がりました。また、地域伝統産業や文化との連携という点では、大学が地域密着型の小規模な大学ですので、地域産業との連携のプログラムをいくつか実施しています。その他、研究者の減少ということで、若手の研究者が少なくなっていますので、若手が研究活動を広げるにあたっては連携というかたちは有効であると思っています。

連携のメリットの一つは研究成果のビジュアル化です。一人で部屋にこもって目に見えない形ですすめていくのではなく、具体的に研究会やセミナーを実施し、意見交換の場を持つことができればそこでの成果が残ります。二点目には領域の異なる人材の出会いの場になっているということ。三点目にそれが好ましい支援に繋がるということです。各領域に教員が一人ずつだったりしますと、学内で何か相談する相手がいませんので、例えば助成金の申請書など書く際にもアドバイスをいただけることがありません。研究生活を送るにあたり、人との出会いはさまざまな支援を得ることにつながります。四点目に心の豊かさに貢献する科学技術への期待です。研究活動、教育活動をすすめていくにあたり、モチベーションの維持が難しいときが多々あります。そういうときにネットワークがあれば、研究活動に直結するものではなくても、モチベーションを維持できるような友情に似た支援が得られます。そうしたメリットを感じました。

私の専門領域に、蚕糸業は直接つながるものではありませんが、私に取り組んでいきたい課題が既存の家政学における領域においてどこに位置づけられるのかが分からないときがあります。また、取り組みたい課題が家政学の複数の領域にまたがる場合もあると思います。そんなときに他の領域の先生方と意見交換ができれば非常に有意義だと思います。

山口厚子先生：

私からは、他領域の研究教育実践者の方と仕事をした経験の中で気づいたことについてお話をさせていただきたいと思います。

まず私のキャリアを簡単にご説明します。現在は名古屋女子大学で専任講師をしており、家政学原論や家庭科教育法、生活経営学関係を担当しています。研究関心の領域は、家政学原論、生活経営学分野、教育（学校や大学レベルでの家政学の教育、家政学を生かすような生活に関わるような教育）などです。これまで関わってきた領域は、心理学、認知心理学、臨床心理学、家族社会学、社会学、経営学、教育工学、英語教育、家政学内ですと、被服学、家庭科教育の先生方と一緒に仕事をしてきました。活動としては研究活動、執筆活動、学会発表を一緒にしてきました。最近主として行っている研究は二つあります。一つは「世界の家政学領域における人材育成・世界への発信方法に関する研究」であり、これは科研の若手研究で3年間しております。今までの経験の中から、グローバルに考えたり行動する家政学分野の人材が必要ではないかということを感じ、それをテーマにしたいと思い、研究を始めました。それに関連して学内のプロジェクトとしては、こちらにも研究資金をいただき、国際交流などの実践をしながら質の高い家庭科教員を開発しよう、ということを試みています。その内容としては、交流を実践することから始まり、現在では他領域の先生たちといかにサポート体制をつくりながらやっていくか、ということをしています。少し具体例をご紹介しますと、これは2年前のシンガポールの高校生と日本の高校生の写真です。シンガポールは家庭科で日本は英語教育の中で、家庭科の内容についてお互いに意見交流するというのをしました。こちらはシンガポールの中学生とその家庭科の先生、それから本校の家庭科教育法をとっている学生とでテレビ会議をして食生活や生活についてのやりとりをしました。

こうした中で家政学の持ち味を考えることが多かったですが、三点あげられると思います。問題解決、学際性、教育です。これが家政学のユニークさだと思います。個人、家族、地域社会の生活場面で見られる問題解決を目的とした研究・教育について他領域の方と連携協力することは家政学者は可能だしむしろ得意だということを実感しました。私は家政学者の良い点として次のようなことを感じました。一つは、学際性を持つということから、他領域の人と広く話がしやすい、ネットワークを作りやすいのではないかと感じました。また問題解決志向を持っていることから、他の分野の人たちよりも生活の質を向上するために必要な研究を提案しやすいと感じました。そして、大学や学校レベルでの教育内容にかかわる教育実践プロジェクトを推進しやすいのではないかと考えています。

一方で、課題にも直面しました。他領域とかかわっていますと重なっている知識があります。専門性の深さと、自分の位置づけに戸惑うことはありました。また国際的な連携をすすめるにあたっては、語学の壁がありました。ただ、そこから気づいたことは、自分のユニークさ、オリジナリティを自覚して発信していく必要性和、自分を見つめるだけでなく専門を伸ばしていく必要性、家政学とは何かということを理解して発信することの必要性、語学の壁はあっても信頼関係を築けば応えられるということです。これらについては自分の力だけではできませんので、ネットワークが必要ではないか、と感じました。

どのようなネットワークが必要かということ、個人のニーズによって違いますが、私にとっては思いを分かち合える人、自分に関心を持ってくれる人がいる、自分の持ち味が何かを考えるきっかけになる、このようになりたいというモデル（メンター）に出会えるということが重要だと思っています。これらが私自身のモチベーションの維持と専門性を伸ばすことに力になったと思います。特にこの間、出産や育児もあって研究をどのようにしていこうかと思うことに直面しましたが、そのときに私のもつネットワークが励ましてくれていたように思います。ネットワークが広がるきっかけは、人との出会い、本との出会い、例えば、ある本の翻訳に参加

させてもらったら、そこでその先生との出会いがあります。国内外の学会ネットワークへの参加、大学や大学院で出会った先生や学生との出会いなどがありました。ICTの活用やARAHE、YPN、IFHEなどへの参加も大きなきっかけになりました。こちらにいらっしゃるコリンズ先生とはYPNで出会いました。これから彼女とさらに研究を国際的に広げていきたいと考えています。このあとコリンズ先生からYPNについてお話いただきます。

エマ・コリンズ先生：

IFHEは家政学の国際的な組織です。100年前にできました。今年はIFHEの100回目の誕生日ということになります。とても重要な年になります。IFHEの最も重要な目的の一つは、世界中の家政学者がネットワークをつくり、共同して研究教育活動をすることです。IFHEでは、グローバルなネットワークをつくる機会があり、1年に1度会議があり、4年に1度は世界大会があります。4年前、私は京都で開催された国際大会に参加しました。参加された方、いらっしゃいますか。私にとって、それは世界中の様々な領域の研究者と出会うとても貴重な機会となりました。

若手プロフェッショナルネットワーク(YPN)は、IFHEの中の若手研究者による会です。若い人、若い気持ちを持った人たちで、家政学のネットワークをつくるという活動をしています。2004年の京都の世界大会のあとに作られました。賢い市民でありたい、国際的舞台でコミュニケーションをしたいという思いでつくられました。YPNの目的は、意見や情報交流の促進です。私たちはインターネットを使って国際的にコミュニケーションをしています。4年前までは、私は国際的に共同したりコミュニケーションをしたりすることはありませんでした。今はかなりインターネットも普及し、個人個人あるいはグループでもインターネットを使ってコミュニケーションができるようになりました。家政学の発展にとって、とても重要なことだと思います。家政学は、みんなが等しく経験しているものの中にもともとあるものですので、世界レベルでグローバルな知見で情報の共有や意見交換ができます。YPNのメンバーは様々な国から集まっており、大学生、大学院生、大学の先生などから構成されています。インターネットの普及のため、ネットワークをつくることは簡単です。様々なレベルでグループを作ることが可能です。IFHEのウェブサイトから是非アクセスしていただけたらと思います。

## 質疑

質問1：

昨年のシンポジウムでは企業等との連携がテーマでしたが、企業の方が、家政学の方が何をしているのかが分かりにくい、連携のきっかけづくりが難しいとおっしゃっていました。今日、皆さんの話をうかがって、既存のネットワークの中に入った方、新たにネットワークを作ろうとされた方がいらっしゃるとお見受けしましたが、きっかけづくりや、最初にネットワークに入ったときの気持ちなど教えてください。

大澤香奈子先生：

私の場合は今の大学に着任したときに既に「もったいない運動」などの連携がすすんでいました。その中で地域とのつながりをもったイベントなどを通して企業の方との出会いがあり、そこから発展していきました。

山口厚子先生：

私の国際交流授業の実践のきっかけになったのは、ARAHE(シンガポール)に参加したことです。会場で小さなブックストアが設けられており、そこで一人で本を見ていたときに、通りがかったシンガポールの方が「何か探してる？手伝ってあげようか」と声をかけて下さり、そこから話が始まりました。意気投合し、彼女が家庭科の教員をしているということで、彼女の学校と一緒に連れて行っていただきました。そのあと、一緒

に何かできればいいね、という話になり、メールのやりとりを始めました。これをもっと何とかしたいということもあり、また国際学会などに出るうち、もっと国際的にやっていきたいと思うようになり、科研と学内のプロジェクトに申請をしましたところ、両方採択され、それで少しすみました。ただし一人ではできませんので、そのとき、学内にいらっしゃる教育工学の先生にお話したりする中で、また広がっていきました。今では情報センターの方、文学部の英文学の先生とも一緒にさせていただいています。別の事例にはこのようなものもあります。アメリカ・フィンランド・日本における家政学の動向についての研究活動にも少し関わらせてもらっています。それはアメリカの先生の本を日本の先生が翻訳されたことから始まりました。日本の先生の翻訳活動やその本の内容にフィンランドの先生が興味を持って下さり、その結果、本を書かれたアメリカの先生が WebCT の中に国際的に話し合うコースを設け、そこで月に 1~2 回チャットを通じ、三カ国の先生方がさまざまなことについてディスカッションをしています。ネットワークに入ったときやつくったときの気持ちはあまり覚えていませんが、私自身を生かしたものができないか、そして自分が面白いと思ったものをやろうと思っていたのではないかと思います。

エマ・コリンズ先生：

2004 年の IFHE (京都) に来たとき、そこに若い人が少ない、若い人同士のコネクションがないということが分かり、その後から活動を開始しました。まだ友達のレベルといますが、研究活動中心というところまではいかないけれども、コミュニケーションをとることから始めています。

山口厚子先生：

私とエマがつながった経緯についてお話しますと、1 年ちょっと前になりますが、ちょうど国際的な実践や研究を始めたとき、もう少し同じくらいの年代の人ですとか、共感できる人がほしいと思いました。そのとき、こちらの若手の会にも入ったのですが、国際家政学会にも何かあったということに気づき、IFHE の HP を開き、そこから YPN のサイトに入りました。そこにエマ先生のアドレスが書いてありました。エマ先生にメールをお送りし、私は入りたいのですがあまり若くないのですが、というようなことを書きましたら、大丈夫と言って下さり、入ることになりました。そのあと彼女がご主人のお仕事の関係で日本に来ることになり、私の住んでいるところの近くに引っ越してこられました。それがきっかけで初めてお会いして、その後話をするようになりました。

質問 2：

先生方の行動力がすごいな、という実感があります。学校業務、教育、研究と行っていく中で研究がさらに連携ということで広がって行って、そのパワーの源は何でしょうか。

大澤香奈子先生：

楽しく生活したいということがあります。興味を持ったことには挑戦してみたいです。 山口厚子先生：

とても重要な質問ではないかと思えます。私は非常に壁にぶちあたりながらきたような気がするのですが、今思えば、むしろそれが、結果的にパワーの源の源になったかもしれません。例えば、ネットワークが少しずつ広がったのは、子どもの出産や育児をする中で、これからどのように研究を続けていけるのかを考えていたときでした。また、それまで自分の研究関心について、なかなか身近な環境の中で共有できる人が見つからなかったのですが、外国に行ったり外国の先生とお話している中で、私がやりたいことをやっている人がいるということに何となく気づいてきました。そのような人との出会いがあって、乗り越えてくることができたと思えます。そういうときにとても励ましてくれたり共感してくれる人がいたということが行動力になったという気がします。

エマ・コリンズ先生：

若い人たちの間にそういう活動がないという現状があり、でも色々な人がいるということが分かったので、それをつなげていくことをしました。人的資源をどう結びつけるかというようなことがキーになっています。

質問 3 :

エマ先生におききます。みなさんは何かのトピックスについて共通に話し合っているのでしょうか。

エマ・コリンズ先生 :

たとえば、栄養教育のテキストで良いのがありますか、とかどんなイベントがありますか、というような情報交流や資料交換をしたりしています。トピックスは様々です。ドイツのように密接に交流しているグループもあります。個人が何かニーズがあったとき、研究のことから色々なレベルで発信しています。家庭科教育について各国の内容のリストアップを作成することも始まっています。

質問 4 :

先ほども出ましたが、私たちの家政学の研究が実際に企業に生かされていない、社会貢献に結びついていないという現状があるということを感じますが、私たち若手の者同士の交流を通じて質の良い生活に貢献できるような研究をこれからネットワークを通じて行っていきたいのですが、コミュニケーションを知らない者同士がとるということに日本人の中には殻があると思うのですが、その殻を破ってコミュニケーションをしていくために日本人若手研究者にとって必要なことは何だと思われるでしょうか。

大澤香奈子先生 :

ネットワークは沢山あるのですが、自分はどういう風に動きたいのかということを明確にし、どのネットワークを使えば自分のやりたいことができる環境を持つことができるのかを考えるといいのかなと思います。

山口厚子先生 :

対話する心、情熱があると通じるのかなと思います。相手を理解しようとし、自分が相手に何かできることはないのかなと考えているとそれは自然にコミュニケーションしてつながって広がっていくように思います。

エマ・コリンズ先生 :

情熱を持ってコンタクトをとっていくことだと思います。必要だと思うこと、求めるものがあってコミュニケーションしたいと思うこと、求めなければ得られることもないと思います。